

高村光太郎著「智恵子抄」を読む

- 愛とは何かを考える -

### レモン哀歌

そんなにもあなたはレモンを待つてみた  
かなしく白くあかるい死の床で  
わたしの手からとつた一つのレモンを  
あなたのきれいな歯ががりりと噛(か)んだ  
トパアズいろの香気が立つ  
その数滴の天のものなるレモンの汁は  
ぱつとあなたの意識を正常にした  
あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ  
わたしの手を握るあなたの力の健康さよ  
あなたの咽喉(のど)に嵐はあるが  
かういふ命の瀬戸ぎはに  
智恵子はもとの智恵子となり  
生涯(しやうがい)の愛を一瞬にかたむけた  
それからひと時  
昔山巔(さんてん)でしたやうな深呼吸を一つして  
あなたの機関はそれなり止まつた  
写真の前に挿した桜の花かげに  
すずしく光るレモンを今日も置かう

P.92 ~ 93

### 梅 酒

死んだ智恵子が造つておいた瓶の梅酒(うめしゆ)は  
十年の重みにどんより澱(よど)んで光を葆(つつ)み、  
いま琥珀(こはく)の杯に凝つて玉のやうだ。  
ひとりで早春の夜ふけの寒いとき、  
これをあがつてくださいと、  
おのれの死後に遺(のこ)していつた人を思ふ。  
おのれのあたまの壊れる不安に脅(おびや)かされ、  
もうぢき駄目になると思ふ悲に  
智恵子は身のまはりの始末をした。  
七年の狂気は死んで終つた。

厨(くりや)に見つけたこの梅酒の芳(かを)りある甘さを  
わたしはしづかにしづかに味はふ。  
狂瀾怒濤(きやうらんどとう)の世界の叫も  
この一瞬を犯しがたい。  
あはれな一個の生命を正視する時、  
世界はただこれを遠巻にする。  
夜風も絶えた。

P.96 ~ 97

高村光太郎著「智恵子抄」新潮文庫、新潮社 1956年7月15日刊

- 2006年10月19日記 -